The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	泉大津織物業の歩み : 大野歳雄氏に聞く (1)
Author(s)	阿部, 武司
Citation	大阪大学経済学. 2005, 55(2), p. 107-124
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/15983
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【資料】

泉大津織物業の歩み

ー大野歳雄氏に聞くー（１）

阿　部　武　司

はじめに

本稿は，大阪府泉大津市の代表的地場産業である織物業に長年深く関わってこられた大野歳雄氏が筆者に語って下さったお話のうち，主に戦前期に関する前半部分を取りまとめたものである。泉大津を含む，いわゆる泉北機業地（旧泉北郡。現在の高石，泉大津，和泉の３市）の近現代に関して知られている史実はけっして多くない[1]が，本稿に関連する大正末・昭和初期前後について述べれば，泉北では日露戦後期から力織機工場の建設が進み，第一次大戦後に同地は大阪府泉南，愛知県知多，静岡県遠州と並ぶ４大綿織物産地の１つとなっていたものの，内地向け小幅白木綿生産がその主力であったため，1920年代から30年代初頭までの長期不況下では，輸出主導の発展を遂げた泉南に比べて織物生産高の推移が停滞的であった。しかし，1932（昭和７）年以降には国内の景気回復の恩恵に浴し，輸出への転換も進んだため，めざましい生産の増加が生じた[2]。1937年７月の日中戦争勃発以降，泉北機業地が戦時統制経済に編入され，自由な企業活動を大幅に制約されたのみならず，その織物業が敗戦まで「不要不急産業」として衰退を余儀なくされた点は多くの織物産地と同様である。

ただし，泉北の内部はさらに２つの地域に分けて考えられるべきであろう。現，和泉市などについては上記の論議があてはまるが，泉大津地方は泉北の繊維産業史上では特異な発展を遂げた地域である[3]。そこでは江戸時代から綿織物[4]のほか真田紐が特産品であり，幕末維新期には木綿生産が振るわなくなった反面，真田紐生産が隆盛をきわめたという[5]。ところが，1880年代前半（明治10年代後半）の松方デフレ期に[6]真田紐が売れなくなったため，同業者団体真盛社（1885年創立。87年解散）が打開策として牛毛服地を試作したのが契機となって泉大津は，1890（明治23）年前後に京都の西陣からジャカード（紋織機）を導入し牛毛毛布生産を始めた。以後，真田紐製造が衰退していくなかで泉大津では毛布生産が盛んになったが，第１次大戦頃から，牛毛に代わって綿が主な素材とな

1　近代の泉北織物業に関する数少ない本格的研究として注３に掲げる文献のほか中島茂『綿工業地域の形成』（大明堂，2001年）が重要である。

2　阿部武司『日本における産地綿織物業の展開』（東京大学出版会，1989年）第１章を参照。

3　泉大津の織物業に関しては岸原吉次郎『大阪府泉北郡大津機業研究』（1920年。『泉大津市史紀要』第９号，泉大津市教育委員会，1985年），杉竹清治郎『泉州綿毛布工業概略』上・下巻（1937年，40年改訂。『泉大津市史紀要』第２号，第３号，泉大津市教育委員会，1978年），日本毛布工業協同組合連合会編『泉州毛布工業史』（1972年），松本貴典「大正期における泉州綿毛布工業の展開」（『大阪大学経済学』第37巻第４号，1988年），泉大津市史編さん委員会編『泉大津市史　第一巻　下　本文編Ⅱ』（1998年，棚橋利光稿）などを参照。

4　白木綿のほか縞木綿も作られていた。水質良質な大津川の恩恵と思われる。とくに宇多大津の綿織物は経済史の研究史上，著名であった。

5　真田紐を基礎に発展した産地には，昭和期に学生服で有名になり，戦後はジーンズなどの縫製で著名となった岡山県児島がある。

6　資料には飢饉とあるが，根本は大不況と思われる。

り，その頃より従来使用されていた手織機に加えて簡単な力織機（足踏機の可能性もある）を備えた小規模な工場が生産の担い手となった。多数の小規模な個人機業家が綿毛布を生産するという特徴はその後近年まで続き，1935（昭和10）年頃には深喜毛織，大津毛織，藤井毛織，松内毛織[7]など羊毛を原料とする紡織一貫の大企業も定着していたが，力織機10台以下，職工10人以下の小零細企業が圧倒的多数を占めていた。20世紀初頭から日中戦争勃発以後の戦時期まで泉大津の綿毛布生産高は伸び続け，泉大津は1935年頃すでに産額で全国第２位の愛知県を大きく引き離す日本一の綿毛布産地となっており，数量で７－８割，価格で９割を占めていた。日清戦後に本格的に始まった輸出向け生産も次第に盛んになっていった。なお，戦間期に入り素材にスフも加わった。

日本の毛織物業は1879年に東京で開業した官営千住製絨所をパイオニアとし，1880年代後半から工業化が進むなかで，愛知県の尾西と尾北などの織物産地，および日本毛織などの紡織会社によっても生産されるようになった。千住製絨所の製品の用途は主に軍服であったが，民間企業では民需用製品も作られた。当初は和服着尺用が多かったが，戦間期には洋服用，さらに輸出向けも増えていった。大阪府で作られていた繊維製品の主力は綿であり，毛織物が作られていた地域は泉大津以外ではあまりなかった。白綿布生産を主力とする泉州のなかで泉大津は，この点できわめて個性的な地域と位置づけられよう。

さて，大野歳雄氏は泉大津（1889年泉北郡大津村，1915年同郡大津町，1942年泉大津市）に1921（大正10）年にお生まれになり，以後，戦時期における徴兵期間を除き，同地に在住され，父上が1920年に創業した織物工場，および前出の深喜毛織株式会社で綿または羊毛の織物製造に昭和末期まで関わってこられた。以下のお話は，記述資料に乏しい泉北織物業史に関して考察する上で，重要な手がかりを提供してくれるであろう。なお，お話中の年号は和暦で統一した。戦後に関するお話は改めて紹介させていただくことにする。

第１回聞取り：2004（平成16）年６月４日
於，泉大津市立織編館会議室

創業期

阿部　本日は，大野さんが記憶されている泉大津の織物業の歩みを自由にお話しいただきたく存じます。最初に，お生まれは？

大野　大正10年４月14日生まれで，本年満83歳です。

阿部　ご記憶が残っているのは，小学校にお入りになる前後からでしょうか？

大野　５歳位から残っています。

阿部　泉大津の繊維産業に関する最初のご記憶はいかがでしょうか？

大野　幼稚園の時まで私のところには手織り織機が15台据えられていました。その枕元で私らは大きくなりました。住み家というよりも，自宅の部屋を工場に変えて織機を据えたわけですね。居室というよりは工場のなかに住んでいたようなものです。私は９人兄弟ですので，みんなで枕を並べて寝るところは２間でした。そこが勉強部屋を兼ねていましたが，ご飯を食べるところは別にありました。板の間です。昔は椅子がなかったので正座して，お膳に向かって食べました。座布団も敷かない。理由は食べ汚しをするからです。板の間ですと後片付け，拭き掃除が楽で清潔になります。父が大阪の船場育ちでしたので行儀がよいのです。正座をせずにご飯を食べると手が飛んできました。それで今でも足に豆ができています。

[7] いずれも戦後の通称。厳密に言えば戦前の名称は，それらとは異なる場合が多い。

食べ物で一番記憶に残っていることをお話ししましょう。織工さんもいたので15人の大所帯でしたから，食事に和え物が出てくると，醤油で味付けしたそれは，一皿に15人分まとめて盛られていました。現在のように一人一人にお皿に物を入れて味付けをし，各自がお皿を食べ終わるとすれば，一皿ごとに醤油が残ってしまいます。毎日の細かいことながら倹約になったと思います。目に見えないことですが，明治の人たちは物を大切に扱いました。

もう一つ挙げれば，夕飯のご飯の残りを明くる日の朝にお粥にたきました。泉州では「おかいさん」と呼ぶ茶粥です。新しい米でお粥をたくこともありましたが，前の晩に残ったご飯を朝粥にするのは船場から習った風習と思います。大津・泉州方面では小学校を卒業すると，船場に商売見習いに出る奉公という風習がありました。昨夕のご飯を朝粥に炊き直すのは３－５年の奉公を終えて実家に帰った人が伝えたと思われます。

阿部　お父様は船場でお育ちになったということですが，織物業はどなたの代からですか？

大野　大正９（1920）年に父の代からです。

阿部　それまではどういうお仕事をされていたのでしょうか？

大野　父は船場で金属師をしていました。指輪やかんざしをこしらえるのが本職でした。祖父は運送業で，大阪の南久宝寺へ泉大津から荷物を運んでいました。そのうち南久宝寺の得意先の吉崎商店という毛布問屋さんから，肩引きの運送をしていたうちの祖父に，「そんな仕事を子は受け継がへんで。一番上には織屋をさしたらどうや？」という話が出ました。金属業をやめて家に帰っていた父が，吉崎さんに言われて織物業を始めたのは大正９年です。父も兄弟が多かったので分家して織物業に励みました。戦時中の企業統制にかかるまで吉崎商店とは取引がありました。開業後まもなく私が生まれました。

阿部　運送業をやっておられたおじい様が，吉崎さんの勧めでおやめになって，織屋を始められたのでしょうか？

大野　祖父はそのまま運送業をやっていて，父が23歳になって独立して，吉崎さんのアドバイスで織物を始めたのです。製品を買ってくれる問屋があったので，仕事は初めから順調に伸びました。

阿部　大正９年には景気が大変悪くなったと思うのですが，お父様はちょうどその時期に織物業を始められたのですね。

大野　資本も吉崎さんから出たと思います。買取主も主に吉崎さんなので，私のところ一軒の製品は全部引取ってくれたと思います。子供の頃，工場が止まっていた記憶はありません。

阿部　吉崎さんが支えてくださったので，不況の影響などをあまり受けず順調に出発できたわけですね。

大野　そうです。話は飛ぶのですが，私が小学校６年生だった昭和９－10年頃のほうが不景気だったと思います。子ども心に耳にしたことですが，よその織屋でやめるところも出てきました。兄弟が５人になっていた私のところの生活も大変だったと思います。父が母に，「こんな織屋なんぼやっていても駄目だ。ブラジルへ移住しようか？」と話していたのを耳にしました。この不景気は後で母に聞いたところ，父が招いた失敗でした。父は先物買いに手を出していたのです。その時分，父はラジオ（まだレシーバー）をよく聞いていました。三品取引で綿糸の投機をしていたのです。父が買うと値下がりする。吉崎さんから資金を借りる。懸命に働いて返金する。また買いに入り値下がりする。借金を返すと，また買いに入る。父は借金の返済が終わるまでは借りないのです。吉崎さんの主人は父を信用してくれていたと母は言っていました。大津の織屋さんには正業の織物よりも先物買いで財をなした家もありました。ブラジル行きの話は三度目の失敗のときでした。

母はそれを止めて，工場に入り，子供のめんどうをみながら織子さんと働いていました。

昭和９（1934）年の室戸台風のときには，工場内に積み上げていた綿糸が値下がりしていた上，水に濡れてしまったため，大きな損金を出しました。多分，吉崎さんから資金を借りて投資していたのだと思います。

朝鮮人労働者

阿部　織物業に進出された大正９年から昭和の初めごろの大津の織物業について，何かご記憶がおありですか？

大野　大津に朝鮮から働き手として多数の人が移住してきていました。こちらで就職先があれば，内地（日本本国を当時こう呼んだ）へ来ることができたのですね。私のところでも15台の織機が動いている中で，半数は朝鮮の人でした。その朝鮮の人たちは，身内を内地に呼ぶ習慣があるので，うちでは初めは使っていなかったのですが，気がよかった父が，大阪に来たいという人を頼まれて，内地でのその身内の就職もお世話して，結局50人ほどを移住させた，と後で父から聞きました。

阿部　50人というのは，一番たくさん来たときで，という意味ですか？

大野　全部で50人ということです。１年に３人来たり５人来たりしました。初めの頃のことは分かりませんが。

小学校からの帰り道に，ホッコ（肩びきのジャリ焼きいも）売りの朝鮮の人が「ぼんぼん」と呼んで，いもをたくさんくれました。学友と分けて，よく食べたものです。同級生から「大野，お前とこ朝鮮に親戚がいるのか？」とよくからかわれました。帰ってきて父に話すと，「それは鄭やな。姜の息子やな」と言います。内地に来た朝鮮の人たちは，繊維業ばかりではなく，各人自分にあった仕事をしていました。そのころホッコは朝鮮の人の専業でした。

私のところだけでなく，他の工場でも朝鮮の人をよく呼びました。今でも三世の朝鮮の人が大津にたくさん住んでいます。

阿部　朝鮮の方は，朝鮮のどちらの方面から来られたのでしょうか？　南ですか，北ですか？

大野　南だと思います。「近い方」と聞いたことがあります。その頃は，朝鮮と日本は一つと考えていたので，はっきりした記憶はありませんが。朝鮮の人たちは休みには，皆仲良くドッジボールをして遊んでいました。期待が裏切られたことはなく，温厚な人たちで，よく働いていた記憶があります。

資金調達

阿部　そのころ作られていた織物は毛織物ですか？

大野　経（たて）も緯（よこ）も綿の毛布です。ここの織編館（おりあむかん）の織機に掛かっていますが，雷紋（らいもん）という柄と棒額でした。その当時，地は無地で，ラクダ色で織っていたので，一般にラクダ毛布と呼びました。大津がここまで発展したのは，このラクダ毛布のおかげです。また「時期もの」の注文がありました。内地物，朝鮮物，インド物，満州物と，４段階で，たとえば内地物が終わると朝鮮物を生産しました。引取りが遅れると，製品を積み上げて出荷待ちしましたが，その当時，手形はありませんでした。そこで，滞貨をかかえているうちに資金がなくなります。先借りはいくらかできたとは思いますが，うちは分家して資本がなかったので，資金のやり繰りには苦労しました。資金繰りの仕事は女性，うちでは母の仕事でした。零細企業，家庭工業ではどこでも資金繰りには苦労していたと思います。

ただし品物が引き取られるのが確実だったので，苦労のなかにも安心感はあった。親戚からの資金の借り集めが終わると，今度は質屋通いで，これは母の仕事です。近所に柴谷という質屋があり，母のあとから私も，母が持てない質

草を持ってついていきました。毎度のことで顔見知りになっていますので，質屋の主人が「いくらいるのや？」と聞けば，母が「20円です」と答えるという具合で，質草の品定めをせずに20円が母の手に渡ります。

出荷まで居宅は倉庫代わりでした。同業者はどこでも同じようなものでした。「都合ついたけ？」が挨拶代わりでした。

ある日，母が，「歳雄，柴谷へ行って，婚礼の服装を借りてきて」という。私は柴谷さんに行って，おじさんにそういうと「はいよ」といって父の衣装を持たせてくれました。婚礼が終わったあくる日，婚礼でいただいた菓子箱をのせて，服装を返しにいったところ，おじさんは，「おまえとこ子供が多いから，これ分けて食べな」と菓子箱を逆にくれました。出荷のために何日か多忙な日が続きます。月末，父が船場に集金に行き，夜には母が返金に出かけます。私が，母について質草を受取りについていきますと，おじさんは，「みんな出たけ？」と一緒に喜んでくれ，質草を返してくれます。明治・大正・昭和初期には大津にもこんな人情豊かな時代があったのだと，今では感謝しています。

大津では私の母と同じく，女の人は子育て，織子の面倒，金繰りとよく働きました。織子は大津の人でも朝鮮から来ても，工場主が，「今度私ところへ来てくれたの，よろしく頼むで」，と借り家，米屋，魚屋，八百屋に連れて顔つなぎに行く。家は借りる。米屋，魚屋，八百屋はみんな「通い」（買った品物の記入帳）を織子に渡して月末払い。昭和初期には，時には盆と正月の節季払いもありました。一銭もなしに大津に来ても，勤め先があればその日から生活できました。町全体が織物業に協力したので，繁栄できたのだと思います。

父が工場に入っているのを見たことはありません。これはうちだけと違います。大津の織屋の主人は魚釣りをしているか将棋をさしているかです。今から考えたら，工場をそれ以上大きくするという望みを持っていなかったようです。食えていたらええんだという解釈だったと思います。

戦前，大阪へ注文受けや集金に行くことを「上行き」といいました。母に，「歳雄，上行きの番頭さんが来てくれているさかいに，お父さん探しておいで」と言われたので，大津中，探しに歩きました。将棋をさしている場所が大津に３，４カ所あるのですが，父は将棋が強かったのです。その将棋をさしているのを探しに歩いて，「お父ちゃん，番頭さん来てるで」と言うと戻ってくるというようなことが，再三再四続きました。

加減見

阿部　工場の管理はどなたがやられていたのですか？

大野　「加減見（かげんみ）」がやります。織機の調節工です。松内さんあたりは加減見のほか，いわゆる番頭さんがいました。男の子が加減見をして技術を全部覚えるのです。技術を覚えて，自分が家で２台でも３台でも織機を据えた工場を持つのが，大津の男の出世でした。それが目的で働いていた人がたくさんいますよ。

阿部　番頭さんは何という名前で呼ばれていたのでしょうか？

大野　「番頭」という言葉はなかったのです。山田さんと言うように，名前を呼んでいました。加減見は，「加減見はいてるか？」と言ったら，それで通りましたが，番頭さんは個人の名前で呼んでいた。

阿部　加減見は，各企業に１人ずついたのですか？

大野　１人ずついました。織機３台を据えたら，織機を動かしながら自分が加減見をします。３台ぐらいでしたら，自分が１台の織子分をやって，加減見をしてやれた。

阿部　加減見は家族の方ではないのですか？

大野　違います。大きい工場ではみんな雇っていた。ただ，私は自分のところの加減見でした。８台ぐらいの織機でしたから。それでも１人布巻き，俗に言う整経を巻く，たて巻きの男の人が１人いたので，たて巻きに来て加減見を習いました。工場には必ず１人は男の人がおりました。

阿部　たて巻きをする人は加減見の見習いなのですね。

大野　気持ちはそうです。「おれは大きなったら加減見をしたいんで，大野へ布巻きに行ってるんや」いう言葉が堂々と通ったわけです。深喜（ふかき）さん，松内さん，あの辺は番頭さんも加減見も布巻きも全部そろっていました。

松内両家のほか，大津で今でも残っているのは深喜ですね。私は，吉崎の綿毛布を織る家業を続けながら，深喜の工場長もしていたことがあります。深喜さんとは昵懇にしていました。深喜さんは，戦前にカシミヤのショールを作り始めました。今の「深喜のカシミヤ」が出た初めです。

カシミヤには紙管（しかん）という糸巻き（原糸）があります。それは１本盗まれても，大きなものですから，深喜さんは工場から外へ出しませんでしたが，私の父が信用があったのと，私も深喜さんでラシャの勉強をしたことがあるので，深喜さんはそれをうちへくれました。そのおかげで，私のところはカシミヤのショールを織るのが専門になりました。

深喜毛織との関係

阿部　深喜さんがカシミヤのショールを作られたのは，いつごろでしょうか？

大野　昭和12年にはもう作っていました[8]。

阿部　大野さんがカシミヤをお始めになったのは，深喜さんが作り始めてすぐですか？

大野　まもなく下請けをして始めましたが，やがて企業統制にかかりまして，うちも廃業になったのです。

私は小学校しか出てません。その理由も大津式です。胸を少々患っていました。それに長男ですから，「家業を継いだら結構食えるから，お前，学校へ行かんでもかまへんのや。それで工場へ入れ」と父が言ったのが，私が学校へ行かなかった原因です。うちは１番，２番，３番が男の子でした。２番目，３番目は全部大阪の吉崎へ３年余り奉公に行っています。５年奉公という言葉がありますが，男の子には俗に言う丁稚奉公をさせるのです。戦争がなかったら，そこの番頭でそのまま続いていたと思います。戦争があって，企業統制とかでみんな家へ帰ってきて，各自勝手な道へ進みましたけれども。

ラシャに入るまでの話ですが，大津に坪内一六さんという，もう亡くなられた人がいます。その人に私はタッチしておらず，深喜さんから聞いたことですが，昭和９年か10年ぐらいに坪内さんが，「大津も毛布だけではだめです。尾州のように背広地やオーバー地を売らなあかんのや」と言いだした。それで背広地・オーバー地のような織物の技術者だった坪内さんが，大津へ迎えられました。

阿部　今のお話の毛布は綿毛布ですか？

大野　毛も含めてです。その一六さんを迎えて手ほどきを受けたのです。組織の分解ですね。そこで藤井，大津毛織，深喜毛織の３者がラシャに手を出した。藤井さんも深喜さんも個人経営だ。大津毛織さんは昭和９年に合資会社になった[9]。藤井さんは知りませんけれども，深

[8] 深喜毛織株式会社編『深喜毛織百年史』（1990年），185－87ページによれば昭和８年頃，製造開始。

[9] 臼谷喜代松が長兄の深井常吉等と創立した大津織物仕上合資会社が，臼谷が経営していた臼谷毛織工場，深井常吉の長男の深井弥之助が経営していた深屋毛織工場を昭和９年に合併して大津毛織合資会社と改称（中沢米太郎『泉州産業界の人々』同盟出版社，1956年，55ページ）。

喜さんは昭和25年に株式会社になった[10]。私と社長と２人寄って，各部へ配置する人を雇うための準備を進め，「ここへ課長を雇わないかん，課長は大学クラスや」ということで，手紙を書いたり電話をしたりした。京都工芸繊維大学の繊維科から一番たくさん迎えています。それが現在の深喜を興した原動力です。そこのメンバーを製絨，紡績，織りの３者に分配しました。メンバーは昭和25年から定年まで12－３人残っておりました。

阿部　話は戻りますが，今のお話ですと，昭和10年ごろから大手を中心にラシャの生産が本格的に始まったと思うのですけれども，それ以前はもっぱら毛布ですか？

大野　どこでもそうでした。深喜さんも３回ほど移転しましたけれども，初め深喜さんのところも毛布ばかりでした。深喜さんは，ラシャに転向したいがために新しい工場を国道26号線沿いに昭和11（1936）年に建てました。今から考えたら，この工場はよく考えたなと思います。私はこのときはタッチしていませんが，昭和12年から２年間深喜さんにいました。食堂から脱衣室，女性の洗面所まで全部こしらえた工場は，深喜が初めてです。それまでは豆腐屋のチンチンと鳴らす鈴が始業と終業の鐘でしたが，深喜さんが昭和11年に大津で初めてサイレンを鳴らしました。

実は私は当時，父とけんかをしていました。そこへ深喜さんが入ってきた。「こんなん，うちで大きいしたかてあかんで。おれのとこへ来させや」ということで，その日から深喜さんへ行きました。昭和13年６月に深喜の社長[11]が召集されたので，辞めてしまった。社長がいたら怖いけれども，企業もあの時分，落ちてきましたし，軍事毛布一色に変わりましたので，家へ帰りました。

戦後の昭和25年に深喜さんから，「株式会社にしたいのや」といわれた。深喜さんは，身内を工場へ絶対に入れません。身内の者は，偉くなってきたら威張るか，親戚風を吹かすかだという。私は他人だけれども，昔から深喜さんに，昭和９年あたりからカシミヤの糸も出してもらったりして信用してくれていたので，深喜さんから，「株式会社にするから来い」と言われたのです。

余談ですが，軍隊で深喜さんはバイアス湾敵前上陸のメンバーで，私も信太山野砲隊の野砲でした。深喜さんがそのときの中隊長の上林さんに「こいつを連れて行ってくれ。お前が死んだらしょうがないけど，お前が戻ってくるときは，こいつは長男やさかい戻してくれよ」というような形で頼んでいた。私も向こう意気も強いし，とことん勉強します。自分の口から言うのも何ですが，連隊一でした。戦後帰ってきたときに，上林さんが深喜さんへ来て，私のことをほめてくれたらしいのです。「あいつは組織の中へ入れたら大将を取って押さえていく」というので，深喜さんが私の反面を見てくれたのですね。

ある日，深喜さんが入ってきて，「兄貴をちょっと貸してくれるけ」と，大津式でうちのおやじに頼んだ。「連れて行きいな。うちの工場，ときどき加減が狂ったら見に来させてくれたらええわな」というようなもので，深喜さんに入ったのです。深喜さんに入ったときに，株式会社にしたいから組織づくりをしたいということで，軍隊の編成板（社員名と勤務先部署を記入した板。出張時には自分の名札を出張の枠に入れて進退を確認する）を２人でこしらえました。私も軍隊で事務室に入ってましたので，編成板とか勤務割とかいうのをよくいじってい

[10] 深井伊三郎が明治20（1887）年に真田紐生産を開始し，同25年に毛布に製品を転換し，その後，織物製造を継続。大正７（1918）年，毛糸自給のために設立した深喜紡績所を昭和３（1928）年に深喜毛糸紡績株式会社に改組した。これら２企業の実態は個人企業であったが，深喜毛糸紡績が母体となって昭和25（1950）年に深喜毛織株式会社が設立されたのである（前掲，『深喜毛織百年史』）。

[11] 深井喜逸氏。

ましたから，「ここへ人事係を持ってきて」と言って400人を雇用したのです。もうおおかた200人はいましたけれども，幹部を新しく雇いました。それが先ほど言いました京都工織のメンバーのほか，信州大学から２人，和歌山大学の前の高松工専から２人で，来たときから課長クラスでした。学歴を持った課長たちが今の深喜さんの株式会社の出発点です。

大津では毛布屋の主人を「大将」と呼びます。それでときどき深喜さんを「大将」と呼びますと，「お前，何言うてるの？　おれは社長やないか。お前が『社長』と呼ばんとほかの者も呼ぶかい」と言って，半分ざれ事ですが，よく怒られた記憶があります。

深喜さんが株式会社にして，30台据えていた織機を60台に増やしたのが昭和25，６年です。私は，「深喜の財産をおれが半分こしらえた」とよく言うのですが，実は，深喜さんと話をして，人も雇ったことだから，織機が30台座ってるところにもう30台増やす，つまり倍にするということになった。倍にする際，私は深喜さんに「尾州の平岩織機を買うてきて下さい」と言いました。深喜さんは私の言う通りにしてくれて，平岩織機に買いに行った。明くる朝，帰ってきているので，「社長，きのうはお疲れさん。話はうまいこといきましたか？」と聞いたら，「平岩のあんなおやじを相手してたら話にならへん。旭大隈を買うてきた」「旭大隈の織機みたいなのを買うたらあかんで」「あかん，あかんと偉そうに言うけど，お前，甲斐性があったら買うてこい」と言うやり取りになりました。

私は，その場で会計へ行って，「名古屋往復と２晩ほど泊まる金を出してくれ」と言って，会計から金をもらって，その晩，夜行で名古屋の平岩さんへ行きました。朝５時に着いたら，平岩さんはまだ閉まってるし，表に立っていると，わら草履を履いたおじいさんが表を掃いてました。「あんた，うちへ用事け？」と言うから，「はい」と言ったら，おじいさんが，「ちょっと中入り。みな出てくるまでここで暖取りなはれ」と言うて，ストーブに薪を入れて一服させてくれた。そして７時半を回った時分に，「はい，長いこと待たしました」と言うて入ってきたのが，そのおじいさん。「おじいさん，もうぼちぼち社長が見えましたんか？」と聞いたら，「わしが社長や」と言います。「これやったらうちのおやじもけんかするはずや」と思いました。「何え？」と言うので，「おじいさん，織機分けてくれるけ？」「あんた，どこから来てん」「深喜毛織や」「きのう，社長が来てけんかしていんだとこやのに，それ知らんけ？」「いや，旭大隈を買うてきたんで，きのう，もめて，お前，甲斐性あったら買うてこいというんで，わしが来たんや」と答えたところ，「あんた，資本家ですか？」と言いました。

その時分，私は工場長代理でして，「工場長代理や」と言いました。「深喜さんが金を出すんやろ？」「深喜さんが金を出すんやけど，その織機を動かすのは私や。社長とけんかしたかて，わしは深喜さんで給料をもろてるのやから，深喜さんの一番ええ方法を取るのや。私はあんたとこの織機にほれてるんのや」と言うと，「うちの織機をなんでそこまで欲しいねん？」と聞きました。

深喜さんの工場には，それまで平岩さんの織機が据っていました。私は軍隊の話をすぐするのですが，鉄砲の機種が違うと，弾を２種類用意しなければなりません。これが深喜さんともめた原因なのです。私は深喜さんに，「あんたみたいなことしたら，平岩さんと旭大隈の織機の部分品を集めないかんのや。そしたら大隈の部分品と平岩の部分品と置くだけでも備蓄が高こつくんや。傷んだかて，この部分品をこっちへ持ってくる転用もできない。旭大隈じゃあかんのや。まだ入ってないのやからキャンセルし」と言いましたら，「お前が平岩のを買うて

きたら，おれはキャンセルするさかい」と大津弁で言われました。そしてそのまま会計から金をもらって行ったら，平岩さんがほれてくれて，それで「あんたに売る」となったのです。

「なんでもめてん？」と言うと，あの時分，織機がいつ入るか分かりません。ぼちぼち製造が盛んになってきたので，戦後の25，26年は織機の取り合いでした。30台買うのですから，平岩さんは「手金を200万欲しいのや」と言います。私，その場で電話を借りて，経理の市村さんに，「手金200万円できるか？」と言うと，「200万ぐらいやったら送ってやれるけど，社長が買うてきた旭大隈はどないするんや？」と聞くので，「事務所で大きな声やったさかいに，『断ったらええのや』，と言うたのをお前も耳にしてるやないか？」と答えた。

その話が済んで，織機を３カ月か４カ月の間に入れることになった。そのときに，「私も家で織屋をしてるんで，私もあんたとこの織機が欲しいのや」と言ったら，「深喜さんの織機30台入れた後，おまはんとこに３台売ったる」と言う。「そやけど金ないで」と言うたら，「月賦でええよ」って（笑）。それで私も欲しかった平岩の織機を買わしてもらいました。

帰ってきて明くる日，工場へ紳士が５人ほど入ってきまして，「大野という人いてる？」と聞きます。恰幅のいい紳士でした。「私ですよ。あんた，どなた？」「わしは旭大隈や。社長が買うた機械をなんでキャンセルするねん？」「あんたも技術者やったら分かる。平岩が据わってて，旭大隈が入って，ここにそろたときに，大砲の弾と一緒で，これは旭大隈さん，平岩さんと，何もかも２種買わないといかんのや。融通が利かんので，わしはここで給料をもろて，わしが心得る一番ええ方法は機種をそろえないかん。おたくらも目が開いてるのやったら，半日でもあんたとこの織機と平岩の織機とどないや見なはれ」とその人に言った。

戦前は，大隈の織機が一番でした。平岩か大隈かと言われていたのです。しかし，平岩は個人経営だったから軍に没取されなかったけれども，大隈さんは気の毒に軍需品に転向させられました。そのときに昔の大隈という名前を売っていたときの技術者も，機械も全部なくなってしまいました。それから一，二の三で始めたのが旭大隈でした。そのために昔のままの大隈織機がうまく作れませんでした。そこで私は平岩へ変わったのです。

その人らは，晩までいました。晩におやじさんが私に，「きのう，あの５人に名古屋の料理店でご馳走になって，織機30台買うてきたんや。織機はキャンセルできても，呼ばれたのに返せるかい」と言います。「そんなんやったら新東洋へ連れていって食わして，『えらいすいませんでしたな』と言うたらええのや」と答えましたが，実際そうなりました。

明くる朝，「きのう，どないなりました？」と深喜さんに聞きましたら，「ほんまにえらいもの買わされたぞ」と言います。紡機を買わされたのです。それまで紡績工場は紡機２山でした。毛をかく山は普通２山でした。それが，一番精巧で最高品の３山を買わされたのです。そして私に，「大野，あの機械が入ってきたら，どこに据えるんや？」と聞きます。紡績は別に分かれていましたので，「紡績の工場長に言うたらええ」と言ったら，「あいつは，そんな場所はないと言うんや」と答えました。

それから私，紡績へ行ったところ，ご存じののこぎり屋根ですから，東側に大きな空地がありました。久井建設の社長だった私の同級生に，「３山の紡機が入るようにオロシを建ててくれ」と頼んだ。正規に建てないでオロシを建てさせて，いつでも紡機が入ってこれるように準備しました。紡機が入ったところへ，アメリカからカシミヤの注文が来ました。そのときに，２山だったらその注文をよう取ってやしません。３山を買ったのは運というのでしょう，社長に面と向かって，「あんた，金運もあれば

人の運もあるのや」と言いました。人とは自分のことです（笑）。「わしがいてるさかい，紡機を３山買うたから，カシミヤの注文を取れたんやで」と言って笑いました。

「今の深喜がカシミヤで名を成したのは，おれが紡機を買わしたったおかげやないか」と，今でも思ってます。その代わり軍資金も出てきたし，気楽に織屋をさせてもらいましたけれども。

そういうふうに，大津というところは，これはどこでも一緒ですが，殿さんと家老とうまいこと息が合ったら，悪いことでもまっすぐに流れていったのです。それから織機30台を平岩さんが入れてくれたとき，職員が帰りしなに，「このあと大野さんのとこに入れるから用意しときや」と言います。そうしたら深喜さんが，「お前，そんな金どこにあるねん？」と言うから，「向こうが３台月賦で入れたると言うてくれてるんや」と答えました。

そうしたらある日，経理部長の市村さんが，「歳雄さん，おやっさんが平岩へ33台分金払うとったぞ。その代わり大野毛織の支払いから毎月５万なら５万，10万なら10万落とすぞ。これはおやっさんの命令や。あいつは今月は入金が少ないさかい，『ちょっと待って』とか言いに来るから，市村，大野と事務的に取引せい」と言いました。

大津では，そういう流れは藤井さんにでもあります。藤井さんの番頭さんに聞くと，「わし，任されてな」というような話でした。大津には株式上場するような会社は少なく，ほとんど全部が家庭工業でした。私は零細企業と言うのですが，零細企業が大きくならなかったのは，家庭という感情，食べられればよいという感情から離れられなかったためだ，という気持ちを持っています。

阿部　大野さんは深喜さんの加減見だったのですか？　それとも番頭のようなお役だったのでしょうか？

大野　昭和12年には加減見で習いに行った。25，６年には，初めは株式会社にするためにおやっさんの相談相手ということで，工場長代理の肩書で行きました。

戦前は大隈鉄工ほどよい織機はなかった。それから平岩さんが出てきた。旭大隈というのは，その時分の職員が寄って再興したのだと思います。その織機が，昔の型も全部なくなりました。昔でしたら，私，多分大隈さんに流れています。先ほども言ったように，平岩さんは個人経営で，そこへ朝の６時に社長が草履を履いて表を掃いてるというような流儀でした。本当の職人根性だったのですね。

大手企業

阿部　昭和の初めごろの大津の織物業界は，深喜さんと藤井さんと大津毛織さんが大手で，あとは規模のあまり大きくない織屋さんがたくさんおられたのですね。

大野　はい。その次は松内両家でしたが，森口，釜下などまだ10軒ほどがありましたけれども，泉大津の毛織業で労働組合組織ができたのは藤井，深喜，大津毛織の３つでした。松内さんをご存じですか？　行ったことがありますか？

阿部　一度お訪ねしたことがございます。

大野　松内さんは明治からあのままです。本宅の裏に工場がありましたでしょう？　それが大津式の家の建て方です。玄関を入って左側が自分とこの居宅，右側に事務所があります。通勤してくる織子さんの出社の番をするためです。ここらは本にも何にも書かれていないのですが，松内さんだけではなく，私のところでも深喜さんでも同じです。深喜さんの場合，朝，店の間で，先代のおじいさんが必ずたばこを吸って新聞を読んでいました。向かい側に事務所があって，真ん中を工場の中までずっと突き抜けるようになっている。万が一火事とかのとき

に，逃げしなに工場の真ん中から表まで抜け出られます。それが１つの名目でしたが，入口が関所だったのです。遅れては行かれません。必ず偉いさんが入口で，ご飯食べる前か食べてからか，たばこを吸いながら，「遅いな」とも「おはよう」とも言わないのですが，じっと座っているのですから。松内さんの方式が家そのままでした。私が言うのは，大津が家庭工業だったからそのやり方でいけたということです。

ジャカードの導入

大津の織物はよその技術者によく助けてもらいました。うちの町内にある竹内という酒屋のおじいさんの家を京都屋といいます。理由は，ジャカードの先を吊るしてムソウを吊る。これを「こしらえ」といい，大津の１つの職業です。その職人を竹内のおじいさんが京都から大津へ呼んできたのが，大津がジャカードを採用した１つの理由です。

今でもやっていますが，小柴機料店が，京都から倉田というジャカードの専門家を呼んできた。今度は京都の龍村さんの従兄弟を，前沢紋工店の主人として大津へ招き，紋紙作りを依頼しました。

前にお名前をあげた坪内一六さんのほか，竹内の京都屋さんが「こしらえ」を，そして「紋紙屋」の前沢さんと，どなたかが他所の土地へ行って，専門家を大津へ招き入れていたのが，大津が織物で成功した１つの原因です。

阿部　京都の技術と考えてよろしいですか？

大野　そうですね。倉田も京都です。ジャカードも大津では京都から来てもらいました。

労働事情（１）

私も父も一番難儀したのは労働基準局ができたことです。労働時間を制限されたから。盆，年末になると受取りですから，織子さんたちは一銭でも多く収入を増やすため，帰らずに８時，９時まで織ります。ちょうど５時半ぐらいから，「みんなきょうは帰らんなあ」というと，近所のうどん屋へ行ってうどんを１杯ずつ織子さんに食べてもらう。そうすると織子さんが腹ごしらえもできたので，また９時，10時まで織ります。それがやかましくなかったのです。織機の音が一円に聞こえます。「はよ帰れよ」とも言えません。織るだけ織ったら帰ってもらいました。

うちの母親でも，子ども９人を大きくしながら，織子さんの経が切れて，途中でなくなったら，経つなぎと言いまして，新しいビームを入れ替えます。私らが11時，12時にトイレへ行くと，工場に裸電球がともっています。「何してるのやな？」と思うと，母が織子さんの経糸をつないでいます。明くる朝，織子さんが来たら，そのまますぐに仕事にかかれます。経つなぎをする４時間，その織機が止まっているわけです。自分の労働を考えずに，機械をフルに回転させるという方向に頭があったのだと思います。

母がやっていましたので，私もそれをやりました。私らは明くる朝，寝ていてもかまわないのですから，夜中に経つなぎをして，織子さんが明くる日来たらすぐに仕事にかかれるようにしました。これはお互いにみんなやってきたことです。

吉崎商店との関係

阿部　先ほどのお話で，問屋の吉崎さんとの取引が織物業をその後支えたと思うのですけれども，戦前あるいは戦争中の吉崎さんとの関係について，ご記憶はありませんか？

大野　戦後の「闇」時代に，吉崎さんはごっそりといろいろなものを持っていました。うちの父が一番信用があったらしい。父は，私と気性

が違い，走ったところを見たこともないような人でした。吉崎さんがそれをさばいてくれ，と来ていましたが，それを父は，よくさばきませんでした。さばいていたら，あの時分に儲けていたと思います。私は軍隊から帰ってきて間がなかったし，でしゃばるようなこともしませんでした。

それからもう１つ，レース編みの機械を据えないか，という相談に番頭さんが来ました。椅子にでも半分掛けたりするレースです。花模様のついたメッシュでした。

阿部　着物の縁の飾りですね。

大野　自動車に乗ったとき，背中のもたれのところに花柄のメッシュで編んであるでしょう？あの機械を据えないか，と来たのです。

阿部　機械を入れてそれを作らないか，という勧めだったわけですね。

大野　それが外国から来たところでした。本当にやっていたら大津でも大阪府でもトップクラスでやっていけたでしょう。

阿部　何年ごろの話ですか？

大野　昭和24，5年かな。私も深喜へ行っているし，工場も順調に動いてますね。父にすれば，危ないことをするというよりも，外国の横文字の入ったような機械を操作するのが億劫だったのだろうと思います。あれだけは今でも心残りです。あのとき，あれをやっていたら，うちの方向もだいぶ変わっていたでしょう。親や自分の人生と合わした中で，こうしたことはだれでも１つや２つ，出てくることだと思います。

阿部　吉崎さんの勧めでお父様が毛布を始められたのですが，できた製品の柄の指定などは全部吉崎さんの注文でしたか？

大野　向こうから来ました。

阿部　金融も吉崎さんが助けてくれたのですね。

大野　吉崎さんが全部してくれました。あの時分は手形がなかったので，１日，10日，15日でしたか，今の御堂筋がまだできていなかったときでしたから，父に手を引かれて昔の心斎橋を歩いた記憶があります。

原糸の調達

阿部　糸の調達も吉崎さんが全部してくれたのですか？

大野　糸は大津の綿糸屋２軒，曽根勝と千百松（ちよまつ）商店から買っていました。

阿部　船場の糸屋さんから直接買われたのではないのですね？

大野　船場から買ったことはありません。経糸，緯糸とも大津で仕入れ，糸は紡績会社から送ってきました。大津の糸商は，紡績とは直取引はできないので，商社が中間に立ちました。曽根勝と千百松はそうした商社の大津における代理店であったと思われます。大津では俗に言う信用貸しでした。

話が元に戻りますが，朝鮮の人をうちに連れてきて，どこかに借家を借りたら，母が八百屋と米屋に行きまして，「この人がきょうからうちへ来るさかい，頼んどくで」と言うと，向こうさんが「通い」をこしらえてくれました。あの時分だから節季払い，盆・正月払いです。これも大津の企業の労働力を維持した１つの原因ですね。現金を持ってこいとか，どこのどなたや，とか言いません。「大野の織子さんやて」と言うと，米を買いに行っても八百屋へ行っても全部貸してくれました。

阿部　糸の場合も盆暮れの決済でよかったのですか？

大野　盆暮れのほか，合いの手に払ったこともあります。逆に「金が入ったさかい，渡しとこか」というようなことも聞いたことがあります。そうしないと固まったらつらいから。

阿部　綿毛布の糸は，かなり太かったのですか？

大野　いいえ。今，織編館に掛かっている経16

番でした。毛布は純毛が20番双子。純毛の経は，腰を，ヌキを打込むので毛布の打込みを強くする糸で，強力でした。同じく今織編館に掛かっている20番は一番安物で腰のない毛布用です。腰を入れないでも構わない。目方が軽いものです。20番と言わずにニマルと言います。16番手が主体でした。ちょっと値が合わないと，ニマルを買っていたと思います。織れたらいいのですから。松内さんはずっとニマル双糸でしたから，強力な経糸を使っており，初めから純毛でした。

企業間関係

阿部　戦前の織屋さんの組合についてお話しいただけますか？

大野　私もその時分は工場へ入っていなかったので，あまり詳しくないのですけれども，毛布組合と毛織組合と２つあったはずです。毛のほうはほぼ純毛で，ラシャです。主体は深喜さん，藤井さん，そして大津毛織さんでした。綿のほうは一般の織屋でした。

阿部　戦前の場合は，大手が純毛製品の毛織もやるようになりましたが，一般の織屋さんは綿毛布でしたか？

大野　一般の織屋は綿毛布でした。毛布を織る場合は，賃織りでした。自分の資本で問屋と取引する織屋さんは100軒のうち30軒ほどで，あとの70軒は賃織りでした。ということは，力織機３台か５台しか据わっていない。みんな私を見たら，深喜の顔やと言うし，私らは相手を見て，あれは大津毛織や，藤井さんや，というように，派閥がありました。

阿部　たくさんおられる織屋さんの７割が賃織りで，その賃織りには系列ができていたということですか？

大野　できていました。そうしないと大手は暇なときに面倒を見てくれません。忙しいときだけはどこへでも頭を下げますけれども，暇になってきたら仕事をくれやしません。そこで年間通じてある程度面倒を見てもらうために，どこかの傘下へ入らないと，零細企業は生きていけなかった。大津ではそこの工場の女工さんが全部織機を動かします。松内さんの娘さんでも織っていますから。

阿部　大手の織屋さんでも，家族の方が働かれるということですね。

大野　織子さんが休んだり，織子さんの手が切れたら，家族も工場へ入りました。うちの家内も，月給取りの娘ですが，嫁に来てから，母親が織るのを見て，「私も習います」と言って，自分も織るようになりました。工場は町内にあり，工場を拡大したくても人家が密集しているので，それを行うには郊外に出るほかないから，織屋は一般に工場を大きくしなかった。松内清さんのところでも今の松直さんでも昔のままでした。現状維持で初めから今まで来ています。牛毛から綿に変わったときが，松内さんらの一番の転換期だったと思います。

阿部　明治初年の牛毛から綿毛布への転換ですか？

大野　深喜さんの社史[12]にも書いてあるように，牛毛じゃあかんということになった。その中心になった松内さんは資本がありましたが，私のところの横の幅３メートルほどの新川に染料を流していました。新川は汽水域で，満潮の時には海から200メートルほど川へ海水が上がってくるのですが，その際，上がってきた魚のイナの稚魚が全部死んだということです。川のへりで松内さんのところが牛毛を晒すか，何かで洗っていたのですね。その川も工場も臭いにおいがしたことが今でも私らの記憶に残っています。

阿部　新川は水質がいいのでしょうか？

大野　そうではなく，普通の生活用水を流すようなところです。臭かったというのはうちのお

---

[12] 前掲，『深喜毛織百年史』。

やじの話です。ちょうどうちの裏で，40メートル離れてます。今はセメン岸ですが，その工事のとき，川岸から牛の毛が出たそうです。

阿部　織屋さんの組合はどういう活動をしていたのでしょうか？

大野　仕事をくれたり，資金の貸し出しをしたりというぐらいのものです。大津の人は自分のことしか考えないから，組合へ入らないといけないから入った，というようなことです。商工会議所でも何でも同じです。

企業整備から廃業まで

阿部　大野織物工場はお父様が長いこと経営されていたのですか？

大野　うちは父の名前で大正９年から始めて，途中，戦時中に企業整備で解体されました。戦後は昭和40年ぐらいまで父の名前でやっていました。

阿部　戦争中の企業整備は何年ごろのことですか？

大野　私は軍隊に出ていたので知りません。帰ってきたら織機はありませんでした。

阿部　戦後，工場を再開されたのはいつごろですか？

大野　深喜さんへ昭和25年に行ったので，うちの工場は遊んでいました。工場を動かすか，といって，25年に再開しました。それも父の名前でです。

阿部　昭和40年ごろに大野さんが引き継がれたのですね？

大野　44年に銀行から言われて名前を切り換えました。そのとき株式会社にしました。

阿部　何年まで続けられたのでしょうか？

大野　やめてから，もう15年になります。

阿部　そうしますと，廃業は昭和の終わりごろですね。

大野　私のところが政府の織機買上げの一番終わりです。それからあとは買上げ金が出ませんでした。大野さんとこが最後やな，と今でも話に出ます。今では織機を持っている人は難儀しています。解体して撤去するのに10万円以上かかりますから。

阿部　織機１台当たりですか？

大野　１台当たりです。今，鉄などは役に立ちません。角野卯三郎さんという大きな織屋が，おととし，「大野さん，織機こわすのに15万くれと言うんや」と言っていました。ここも古いのです。資産家で真田紐を作っていましたが，のちには純毛専門になって，松内さんらと肩を並べるようになりました。

牛毛毛布

阿部　真田紐は江戸時代に泉大津の繊維産業の基礎になったといわれておりますけれども，明治期の早い頃にこの地域の経済が非常に苦しくなり，真田紐が売れなくなって，それに代わって先ほどお話が出た牛毛の毛布が入ってきたということでした。真田紐から牛毛の毛布へというのは，何か飛躍があるような気がするのですけれども。

大野　そうです。牛毛を手掛けた家は深井系統です。深喜さんは大津毛織さんの深井という工場設立者の分家ですが，深井と松内さんが手掛けたということだけしか，私らは聞いていません。兄弟ばかりで寄って，綿糸以外に俗に言う開拓をやりかけましたが，失敗でした。

阿部　大変ユニークな発想といいますか，牛毛自体はその後残ったわけではないのですが，結局，綿毛布に移って，それで成功したという，後から見ると見事な結果でしたね。

大野　よく考えたな，と思います。今からみると，羊は五体全部といってもよいほど毛がありますが，牛の毛は胴体だけです。牛１頭の毛が，そこまであったのかな，と思ったりします。羊１頭の毛を刈るときは，ポコッと盛り上がるだけあります。牛の場合は，馬と一緒で

す。私は馬にばかり乗っていたのですが，冬毛と夏毛とあるけれども，１頭の毛が生えかわっても量は知れています。牛にそんなに毛があったのかなという疑問を１つ持つほか，牛毛は，硬くて繊維が短いから，糸にするのがそもそも無理だったと思います。

大津毛織さんの創業者の分家は，深福さんといいます。屋号は深井福だったと思います。私，顔は知りませんが，息子さんとは昵懇でした。そこは，松内さん，大津毛織さんの創業者たちと寄ってやりかけて失敗し，立ち直りが遅かった。結局は資本力の問題で，松内さんらは一度も崩れないで，そのまま現在でも続いています。

深喜さんは，同じ系列ですが，創業者が養子さんでしたので，牛毛には手を出さなかったとみています。大津毛織さん，深喜さん，深福さん，全部兄弟屋（身内）です。深喜さんは，私が知っているときは，大阪西川と毛布の取引を持っていました。

労働事情（２）

阿部　戦前，朝鮮から女工さんたちがたくさん来られたというお話がございましたけれども，日本人の女工さんたちは近くにお住まいだったのですか？

大野　全部近くです。

阿部　通っておられたのでしょうか？

大野　大津だけは寄宿がなかった。全部通いです。松内さんも深喜さんも，今も借家を何十軒と持っています。それが自分のところの勤め人の住むところでした。今も川の向こう側に松内さんのところの借家があります。戦前ですから長屋建てで５－６軒棟続きの借家です。私ら生まれたときに，もうその借家がありました。そこへ織子さんや管巻きや自分のところに通ってくれる人の，俗に言えば社宅です。大津では社宅とは言いませんでしたが。

私は深喜さんの家を１軒ずつ知っていますが，３代にわたって深喜へ勤めに来た家がたくさんありました。孫が大きくなったから使ってくれ，とか，育児の手が離れたから，また機を織らしてくれ，といって，向こうから頼みに来ました。家を借りているのですから，当たり前のことでした。

阿部　女工さんたちの年齢は幾つぐらいだったのですか？

大野　小学校を出るなりです。小学校から上級の学校へは行かない。

阿部　それから結婚する前まで働くのですか？

大野　そうです。

阿部　未婚の女性ですね。

大野　未婚の女性も多数いましたが，子供ができても，年寄りがおもりをしますから，大津では結婚したあとで働く人もいました。結婚の道具を作るため，自分で働く織子さんが大津では少なくなかった。経営者と織工その他従業員は身内同士の交際で，私でも幼児のとき，おもりをしてくれた織子さんが多くいて，結婚後も道で会うと，「大きなったな」とよく言われました。

阿部　育児の手が離れた年配の方も来られていたのですか？

大野　そうです。大津毛織さんに勤めていた人で，月に夫婦２人で50万円，年金を受けている家がたくさんあります。織子さんと加減見の，今でいう社内結婚です。加減見の嫁さんはたいがい織子さんでした。

阿部　戦前は女工さんたちが長い時間安い賃金で使われていたということがよくいわれます。それ自体は客観的に見て真実だったと思うのですけれども，この点につきまして何か感想はおありですか？

大野　経営者の立場から考えたのではなしに，私自体も深喜さんで16年月給生活をしていたので，搾り取られた，あるいは女工哀史というのか，そういう解釈はとりません。貝塚や泉佐野

の女工さんと大津とは別で，大津では，通勤ですし，風呂屋へ入ったら，「あんたとこ，深喜さんへ行って，どれぐらいもろてるねん？」とか，給料がすぐに分かってしまうのです。大津の人は風呂が好きで，町内に必ず１つ風呂屋がありましたが，そこでは「おれのとこはこれぐらいで」という話をするので，給料を落としたら，その織子さんは逃げます（工場変えをします）。そんなこともあって織子さんが酷使されたということはありません。ただ，時間が長いのが問題ですが，時間が長くても，受取給ですから，自分が働いただけ給料は上がるのですからね。なお，技術を向上させるために，工場から優秀な織子さんを出して，審査員が５，６人出て，織子さんの競技会をやりました。

阿部　先ほど新川のお話が出て，川の色が変わったということでしたけれども，できた毛布を染めるなどの加工も大津でやっていたのでしょうか？

大野　毛布はすべて大津市内で作りました。

阿部　完成品が大津だけでできて，それが問屋や商社に売られたということですか？

大野　そうです。スタートからいけば，原糸を曽根勝で買ってくる。緯糸も，うちでは曽根勝，千百松です。それを染め屋へ出す。または管巻きにする。そして毛布に仕上げる。そうしたら自分のところに出入りする系統の起毛屋がある。起毛からミシン屋も同じ系統である。ミシン屋から工場へ製品が戻ってくるわけですね。この製品は，柄・生地を見ると大野の製品や，深喜やと，各工場の特色がありましたから，私らはすぐにそれが頭にきます。染め屋もそうです。しじゅう「どこのを染めてるねん？」とつい聞きます。

葬式とかお通夜の晩には情報の取り合いです。「大野さん，このごろ何織ってるねん？」というようなものです。そこで私らにしたら「深喜やから賃機を納めてくれ」ということです。「藤井さんのを織ってるんだったら，うちも手伝ってくれや」というようなことで，抜き合いというのでしょうか，賃機の取り合いをする，そういう時代がありました。ガチャマンといわれるような時代のことでしたから。

阿部　ところで，昭和10年ごろ織物は手機では織っていなかったのですか？

大野　昭和10年には手機はなかった。もう力織機でした。手機のなくなるのは早かった。その時分，風呂でも炊事場でも薪を使っていましたが，うちの裏には大きな広っぱがありました。鉄の織機が入ってくるのですから，使わなくなった手機を割って山積みにしてあった。薪に使うので，山積みにしてあったもののなくなるのがまた早かったこと。

角野卯三郎さんの祖父が，「これで泉大津がここまで伸びてんやさかい」と言って，工場も広かったので，手機を１台だけ残しておいてくれました。織編館にある織機です。私が幼稚園から小学校２年か３年の頃，２軒ほど木で手機を作っている工場がありました。

電力の使用

阿部　力織機を動かす動力は電気でしたか？

大野　電気でした。面白いことに，「大野は昼でも電気がついてる」と言われました。あの時分は，普通は夕方５時になって初めて点灯しました。電気の球が１個か２個切れたら，ここらですと南海泉大津駅窓口の「散宿所」に印鑑を持って電球を交換に行くのです。料金は無料でした。当時，一般家庭は電球を電気会社から借りており，１軒１個，２個というように電球の個数が決められていましたが，織屋は売っている球を買えました。工場にはメーター計がついていました。向こうの家とうちの家とどうやって区別するのだろうかとよく思ったことがあります。そうしたら，うちにはメーター計がついている。よその家にはメーター計がついてない。普通の家は，電気会社が管理する電球２つ

しか付けられません。うちらは電気屋を呼んできて，織機の前と後ろといくらでも電気をつけられた。メーターで電気代を払いますから。一般の家庭では規定の球だけ申請して，そのつぎ線を買ってきて電球を増やしても引っ掛かって電気を切られていました。

阿部　工場では昼間でも電気がつけられたわけですね？

大野　つけました。工場や店屋は明かりが必要なので，メーター計をつけて，電球の個数はいくらでもよく，昼でも電気がつけられたのです。

紡績業の展開

阿部　先ほど深喜さんのお話の中で，紡績を戦後やっておられたとありましたね？

大野　戦前からやっていました。

阿部　いつごろからでしょうか？

大野　私が生まれたころ，深喜のおじいさん[13]は，川のへりにある会社に行くので家の前を通っていました。大正に入ったころ，深喜さんは紡績をやっていたと思います。深喜さんが儲けた原因は，原料に強かったことです。原料の識別が上手でした。大津毛織さんは紡績をやりませんでしたが，藤井さんは紡績を持ちました。自分のところの毛布糸を引く関係です。

その紡績でも系統があって，「どこの引いてるねん？」と聞くと，「深喜のを引かしてもうてるねんや」とか，「藤井さんの糸を引いてるねや」というような答えが返ってきました。

阿部　泉大津の中でですか？

大野　いわゆる売糸の紡績ですね。

阿部　泉大津で専業の紡績は戦後にできたのでしょうか？　戦前からありましたか？

大野　戦前からです。戦前，綿毛布の経糸・緯糸については綿糸屋が３軒あり，各織屋ともそれらの売糸を使用していましたが，深喜と藤井が自家製の糸が必要になったため紡績を始めてから，紡績経営もはやるようになりました。私の知っているのでは岩月紡績と吉野紡績があります。それらは戦後伸びました。全部深喜さんの技術者が独立したもので，みな財を成しました。織屋ではぐっと伸びた家が少なかったけれども，紡績では中島紡績，吉野紡績，岩月紡績のように伸びたところが多いのです。

岩月の社長は愛知県三河の出身でした。三河の蒲郡あたりには紡績もあったので，技術者として大津に大勢来たのだと思います。松内さんの長屋に住んでいまして，息子が私の１級上でした。戦後，財を成しました。

阿部　大津という産地は，糸から最終製品まで全部あったということですね。

大野　そうです。綿毛布は全部よそからです。経糸もニマルも，日清紡などから入ってきました。純毛は全部自分のところ，大津市内で賄いました。深喜さんは，日本紡毛紡績工業組合連合会理事長をしていたと思います。

阿部　長時間どうもありがとうございました。ひとまず終わらせていただきます。

（大阪大学大学院経済学研究科教授）

[13] 深喜伊三郎氏。

History of Weaving Industry in Izumi−otsu of Osaka Prefecture Talked by Mr.Toshio Ohno (1)

Takeshi Abe

This essay is a record of the talk of Mr. T. Ohno about the history of weaving industry in Izumi−otsu district, a part of the Senboku weaving area, of Osaka Prefecture. Mr.Ohno was born in 1921, and had worked at manufacturing cotton and woolen fabrics at the factory established by his father and at Fukaki Keori Company for a long time, except for the wartime. His talk is very valuable for the research about the history of weaving industry of Senboku. This essay is related mainly to the prewar period.